

杏林

KYORIN DAIGAKU SHIMBUN

大学新聞

2010年8月26日発行

- 第4号**
- 対談・志は高く、前向きに
 - 中期計画本格始動へ
 - 作業療法学科開設にむけて
 - 学生支援の取り組み
 - 学部・大学院トピックス ベストナインに切手選手と廣田選手



金田一秀穂 (きんだいちひでほ)
1953年東京生まれ。上智大学文学部卒業、東京外国語大学大学院修了。中国大連外語学院、米イェール大学、コロンビア大学などで日本語を教え、ハーバード大学客員研究員を経て、現在、本学教授。1988年外国語学部創設時より教鞭をとる。祖父は言語学者の金田一京助氏、父は国語学者の金田一春彦氏。著書：『汚い』日本語講座』(新潮社)、『一日歳時記』(小学館) など多数。

志は高く、前向きに 出会い、見つめ、悩み、羽ばたく

杏林大学は、医学部、保健学部、総合政策学部、外国語学部を擁する総合大学に発展し、現在、三鷹キャンパスと八王子キャンパスに約5000人の学生が学んでいます。

複雑化していく社会にあって、これからの大学教育では学生たちが高度な知識を習得すると同時に、さまざまな体験を通して思考力や判断力を養い、社会人としての基礎力を身につけることが求められています。

本号では八王子キャンパスで20余年、学生を見続けてきた金田一秀穂教授と三鷹キャンパスで学生部長を務める松村譲児教授に、いまどきの学生気質、学ぶこと・悩むこと・経験することの意義、杏林の持つ魅力、学生に望むことなどについて熱く語っていただきました。

外国語学部
金田一秀穂 教授

医学部
松村譲児 教授



松村譲児 (まつむらじょうじ)
1953年東京生まれ。北海道大学医学部卒業、同大学大学院医学研究科修了。88年UKレスタター大学留学後、北海道大学医学部講師、北海道大学医学部助教授を経て1993年より杏林大学医学部教授。専門は肉眼解剖学、組織学。著書：『イラスト解剖学』(中外医学社)、『人体解剖ビジュアルからだの仕組みと病気』(医学芸術社) など多数。

よく遊び、よく学べ

松村：先生の学生時代はどんなでしたか。熱中したこととか。

金田一：よく遊びよく学べ、の言葉どおりの学生生活でしたね。友達とほんとうによく遊び、旅行などにもよく行ったりし、パチンコなどもしました。いろんなことを知りたい、探究したいということで、自分でこつこつ勉強するタイプでした。教師に言われてするのは好きではありませんでした。

高校・大学時代は楽しいことも多かったが、つらいことや苦しいこともいろいろありましたね。

本はたくさん読みました。若い時はその良さがなかなか分からなかったのですが、古典はおもしろくかつ深いですね。学生に「古典はいいぞ」とすすめると、「先生も年とったね」などと軽く言い返されますけどね。

松村：私の場合は中学・高校の頃は生物が大嫌いだったので、まさか大学で解剖をするとは夢にも思いませんでした。バッタの断面図なんて見るのもいやでしたね。

大学の頃は学校にはあまり行きませんでした。パチンコ屋はほぼ毎日行っていました。手持ちが200円しかない時、翌週の食費にするか一か八かを狙ってパチンコ屋に行くか悩んだものです。「金欠こそ学生のステータス」みたいに思っていましたから、お金がないのは気にしていませんでしたが、授業料を使い込んだりして同姓の同級生の実家に間違っって督促が届いたりしました。

は、勉強も何人かでするものと考えているらしく、大学に自分たちが勉強する部屋がほしいという要望を出してくる。僕など、勉強は独りでするものと思っていましたが。

金田一：学生は、全てのことに必ず答えがある、教授はすべて答えを知っていると思っている。疑問符をつけたり、「それは難しい問題だ」、「わからない」などと答えると、この人は本当に先生なのだろうかと疑惑のまなざしを向けてきますね。

松村：分厚い教科書を持ってきて「これ全部覚えればいいスカ？」と聞いてくる。「覚えられればね」というと不満そうな顔をする。教科書によって書いてあることが違うと「どっちが本当ですか」って。「どっちも正しいかも知れないし、どっちも間違いかも知れない」というと「じゃ、試験に出ませんね」なんて。

金田一：すぐに答えをほしがり白黒をつけたがるけれども、「それはなぜか」と自分で問うていくことが大事なのです。答えを覚えてしまえばいいというものでもない。解釈はいずれ変わってくるのであり、柔軟性や適応力が大切です。変化に対応する力が求められているのです。

松村：教育方針が利他的になってきているという指摘もありますね。

だからなのかも知れませんが、解答が決められないこと(試験にでないこと)は学ぼうとしない。「ムダだ!」って。

金田一：短期的な教育と長期的な教育とそれぞれあると思いますが、今は即効性がある、効率が高い、短時間ですべて理解できるなどという短期的な教育ばかりが求められているようにも思えます。授業評価についてもその場の評価でなく、10年

後の評価があってもいいのではないかな。社会に出て大人になって「あの先生はいいこと言っていたなあ」と思っしてほしいわけです。

学問と探究

松村：私のやっている解剖学は基礎医学の1つですが、「基礎＝簡単」と思われているようです。基礎ほどわからないことが多いのですが。私たちは解剖学を通して「人間」という自然を学び続けています。医療・医学は人間が創造したものではなく、自然の力に気付くことで生まれてきたものであることを知ってほしいと思います。解剖では「人体」という自然との対話を体験して欲しいのです。

学生は医学や医療を理科系だと思っているようですが、私は一番文科系だと思っています。もちろん事実の追究は重要ですが、真実は我々の理解できないところにあるかもしれない。正解が1つというわけではないのです。相手によって、年代によっても答えは変わってきます。相手は自然ですから、正解はその声をどう感じるかということになりますね。

金田一：言葉の世界には解釈の問題があります。解釈は時代や人によって文脈によって異なってきます。これが正解だ、というものは、多分永遠に届かない先にあって、そこにどこまで近づけられるか、というのがこの学問の向かっているところなんだと思います。

「経験」が大事

松村：当然とされてきたものが、突然間違いだということも起こるのですね。



写真左：紺碧の秋空に映える白亜の校舎。八王子キャンパスのC棟(1F.学生食堂ガーデン丘、2F.学生ホールとテラスなど)の全体は「船」をイメージしてデザインされ、外観は白、内部空間は1Fが白と青、2Fが白と朱が基調となっている。1992年日本建築士事務所協会賞受賞。設計は建築家山縣洋(やまがた よう)氏。奥の外国語学部校舎E棟も同氏の設計。右手D棟とはブリッジで結ばれている。ちなみに保健学部校舎も山縣氏の設計。右上:C棟2F多目的スペースの朱色の壁。左手ガラス面を透して裏山の雑木林が見える。右下:熱心にノートをとる保健学部の学生たち。下中央:人文・社会科学図書館所蔵ファクシミリ版『リンディスファーン福音書』表紙、部分。

当世学生風景

松村：学生の気質も以前と今ではいろいろな点で違いますね。今の学生



「こないだ言ったことと違う～」と学生が言えば、「そうなの、これが人間のな」、「字が違う～」と見え、「いいの!」。そうやっているほうが、長い意味での教育なんだろうと思うのです、と教授。

最初の授業では「人間が病気を治すことはできない」と話します。じゃ医者は何をするのか、となるんですが、症状が良くなるようにできることをするのであって、「医者が治す」という認識は正しくないのだ、と教えます。

今の医療界は“evidence based medicine (証拠を基にした医療)”が基本とされています。たしかにevidenceも大事ですが、個々の医者の経験、つまりexperience based medicineこそ大事なのではないかと。経験(experience)がその医者の証拠(evidence)になっていくのだと思います。

かつては先輩の医者たちがすることを見たり聞いたりしていわゆる盗んだのですが、今は分業化して盗むこともできなくなっています。

金田一：医者においても徒弟制度的なことが本当は大事なんですね。医者だけでなく、今の若い人はどうしたらあの人のようになれるか、どうやったらすぐそれができるようになるか、経験を省いて効率・能率を求めたがる。すぐマニュアルを求めますよ。

松村：料理人の場合は、親方のところで修業して、皿洗いからはじめて、「お前なんかやめちまえ」などと怒鳴られながら、それでもなんとかがんばって叩き上げられて覚えていき、それからようやく板場に立つ。今の医学部の学生にしる、若い人にしる、そのようなプロセスがないのです。

面白い感性を持つ学生たち

金田一：外国語学部には面白い感性を持った学生たちがいます。

杏林大学に入学してくるのは受験勉強が下手だった子が多い。学習して記憶し、それを正確に再現できるのが受験のテクニックです。それは下手だったが、他の面で優れていて、たとえばやたら難しい映画を観ていたり小説を読んでいたりと、人間の能力はいろいろなのだと気付かれます。

医師はバックボーン、通訳は幅広い知識が大事

松村：医学部の場合、医者になるために学生が医学を懸命に学ぶのは当然のことですが、もうひとつは医学以外に何をやったかが大事です。良い医者となるためにはこうしたバック

クボーンが必要なのではないかと思います。

金田一：言葉の世界もまさにその通りなのです。外国語が大変よくできる学生たちがいます。言葉は道具であり、その言語を使ってどうするのが大事なのですが、そこでうまくいなくなる子がいます。勉強ができて、英語、中国語がよくできるとしても、通訳になるのだったら、それこそ政治、経済、文化、歴史、風俗などさまざまな幅広い正確な知識が必要になってきます。単に外国語を日本語に、日本語を外国語に訳せばいいというものではない。

松村：少し日本語を学んだだけなのにペラペラどころか、日本人でもわからない微妙なニュアンスまで理解できるようになる留学生もいます。こういう例を見ると、コミュニケーションは表面的な言葉のやりとりではなく感性が大切な気がします。

金田一：言語が異なるために外国人とは理解しあうことが難しいとよくいいます。しかし、人間の言語能力、コミュニケーション能力は基本的にどこの国の人でも変わらないと思います。だからといっても言語が同じであっても人と人が理解しあうことはなかなか難しいんです。

偏差値は一つの尺度にすぎない、何をやるかが大事

松村：学生の中には杏林への入学は本意ではなかったと思っている学生もいるようですが、たとえ第一志望の大学に入学できなかったとしても、そのことで意気消沈してはいけません。どの大学よりも、大学で自分が何をやるかが大事なんですね。偏差値の高い大学に入って、なまじ変なプライドをもち不遜になっては困る。特に医者には謙虚さが求められます。

金田一：偏差値などは一つの尺度にすぎないのであり、そんなもので人間の能力が判断できないのだということを、世の中のたいいていの大人は知っています。教師にも、つまらない世間的価値観を信じ込んでいる人がいて、東大教授が一番偉いと思っている先生もいる。おかしいんです。

私が大学受験した時は、心理学を学びたかったので、いい先生のいるところ、1年生から勉強できるところという観点から大学を選んでいきました。そうすると上智大学がたまにそうだった。現在は、大学を選

ぶ際に大学名と偏差値で決める傾向がありますが、自分がどんな勉強をしたいのかを徹底的に考えてからどの大学に行くべきかを選ぶべきで、そうすれば大学で自分が心から好きだと思えることと出会えると思います。ただ、18歳で自分の本当のやりたいことを見つけるのはむずかしいでしょうがねえ。

素直な学生が多い杏林

金田一：外国語学部は学生のコミュニケーション能力が高いのか、学生に「遊びにおいでよ」というと、本当に研究室に“遊びに”来ます。

松村：杏林大学にきてまず感じたのは素直な学生が多いことです。最近では近所でも挨拶をしない人が多いですが、杏林の学生は廊下や道でも気軽に挨拶してくれます。挨拶はどんな社会でも基本ですから大事なんですが。

教室での教育に大きな意義

金田一：正しい情報・知識をたくさん教えるのがいい先生だとしたら、それはコンピュータ、図書館の本にはかなわない。わざわざ大学に来て、教室に来て、先生と向き合って、講義を聴き、勉強し、レポートを書いたりする必要がない。また、テキストその他を読んでその学生がそれできちんと分かるのだったら大学に来なくていい。また私のほうでも、本を読んだだけで分かるようなことを教えたいとも思わない。

教室でなければできない教育をしたいと思うので、自宅にいて講義を受けられるインターネット授業はちっともいいと思えない。これは教育の自殺行為だと思います。

大学に来て、キャンパスで学生が先生や友達と同じ空気を吸い、いろいろ出会い、困ったり、悩み、笑い、叫び、騒いだりしながらやっていくという人間的な触れ合いを肌で感じる事が大きな意味での教育なのです。

詰め込んで覚えるだけならコンピュータにやってもらえばいいのです。それよりもリファレンス能力、いろいろなものをつなぎあわせる力が重要なのです。そういうことを杏林の子は知ってほしいと思います。

総合大学・杏林の強み

松村：学生にとって、何が将来武器になるのか分かりません。ですから、



松村教授による医学部2年生の授業。この日は「耳」のしくみについて。40分の座学では松村教授自身が描いたイラストをふんだんに使用したスライドで耳管とその周辺の構造を学ぶ。次に教室を移動して解剖室で50分の実習。「解剖」というと、医学領域の中では医学の基礎で、基礎だからやさしいんだという意識があるようですが、実は難しい。死の尊厳だとか、人間の尊厳だとかは、教えてわかるようなものではない」と教授は語る。

本来、大学はたくさんの科目を用意しておくべきです。そこで学んだことを武器として使いこなせるかどうかはその学生にかかっています。でも、現実には、大学のいまのプログラムでは無理です。かつて教養科目と言われた科目も、体育、ドイツ語、数学などの科目もどんどんなくなっています。

どこの医学部も同じことしか教えずなくなり、大学を選ぶ意味がだんだんなくなっていますが、杏林では学生がいろいろなことを経験できるようになればいいと思います。インドネシア語とかマレーシア語とか。「杏林に行けばタイ語のわかる医師がいる…」なんていうことになったらすごいですよ。

杏林は三鷹と八王子のキャンパスに4学部あるので、その利点を十分活用できればとも思います。三鷹キャンパスの学生には金田一先生の「日本語」の講義を絶対に受けてほしいですね。

学部を超えた交流

金田一：八王子キャンパスでも「医学概論」などの講義をしてほしい。医学については人間として基本的に知っているべきことなのに、知らないことがあまりにも多い。たとえば、病気とはそもそも何なのか、病気を治すことができるのか、お腹が痛いとき、熱があるとき、どうすればいいのかなどです。

私は日本語教育者として途上国の衛生状態が必ずしもよくないところに行くことがあります。一行のうちだれかが必ず下痢をしたり体調を崩すことがあります。

すでにお亡くなりになりましたが、かつて医学部にいらした寄生虫病学の辻守康先生(注)に八王子キャンパスで講義をしていただきましたが大変好評でした。

松村：日本の大学には寄生虫病学の科目がほとんどありません。国内の寄生虫病が激減したことも理由の1つですが、寄生虫病学の講座そのものがほとんどなく、杏林大学を含めて専門家がいる大学も数校しかないのです。辻先生は、今の医者は寄生虫病学をきちんと学んでいないから、途上国からの帰国者が寄生虫に感染していても診断できないのだとおっしゃっていました。

(注)：元杏林大学医学部教授。20数年にわたり中央アフリカで寄生虫対策に取り組む。フランス教育功労勲章、中央アフリカ友好勲章・教育功労勲章などを受賞。元WHO寄生虫対策専門委員。

志を高く持って前向きに進む

金田一：若い時はいろいろな疑問にぶつかりますが、あわてて判断してはいけません。性急にこうだと決めつけてしまうと自分が縛られてしまう。急いで言語化してしまうとそれ以上考えなくなってしまう。思考停止をしてはいけません。疑問を持ち続けることが大事で、いつかその答えが見つかる時がくるかもしれ

れない。焦らずに忍耐強く待つことです。

とにかく何事においてもあきらめず、自分を見限らないでほしい。学生は、志を高く持って、前向きに進んでいってほしいと思います。

松村：私などいまだにそうですが、悩んだり落ち込んだり後悔したりの日々です。だから学生さんが悩んだりする気持ちはわかります。落語の枕にもよく使われる「ぼうふらや蚊になるまでの浮き沈み」という句が

ありますが、いつかは天高く羽ばたいて行って欲しいですね。

長時間ありがとうございました。



中期計画本格始動へ

杏林大学中期計画実行委員会委員長 神谷 茂 (学長補佐、医学部教授)

平成21年4月に設置された杏林大学中期計画検討委員会では、中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」が求めている教育の質を保証するシステムの構築のための具体策を検討するとともに、杏林大学の教育の質を向上させ、杏林大学全体のクオリティをさらに高めるための多くの議論をしてきました。

本年3月、中期計画検討委員会最終報告書「杏林大学のクオリティを高めるために」を

策定し、4月に発足した中期計画実行委員会とその10部会が協議した中期計画の実行案をとりまとめました。

実行委員会では実行計画の細部について詰めの検討を行ったうえで、秋以降順次、実行体制に移ることになっています。最終報告書の骨子は次のとおりです。

詳細内容は本学ホームページをご覧ください。(http://www.kyorin-u.ac.jp/)

【1】大学の教育目標を明示する

1. 杏林大学の建学の精神は、「真・善・美の探究」である

2. 杏林大学の教育目標

- (1) 高度な科学的知識および技術、豊かな教養を備えた人材を育成する
- (2) 高い学習意欲と積極的な行動力を身につけた人材を育成する
- (3) 優れた感性と風格、そして他者に対する愛情や思いやりを有し、高い倫理観を備えた人材を育成する

3. 杏林大学の教育方針

建学の精神を尊び、杏林大学での学修により、学生は以下のような能力を身につけ、社会に貢献できる有用な人材として成長することを目指す。

- (1) 学部の枠を越えた、医学、保健学、社会科学、人文科学などへの幅広い理解力
- (2) 実践的な語学力
- (3) 国内外の情報・情勢の正しい分析力
- (4) 生涯を通じて学ぶ姿勢
- (5) 良好なコミュニケーション力
- (6) 行動力とリーダーシップを培う力
- (7) 高い倫理観に裏付けられた優れた社会性

【2】教育の質の向上を図る

中教審答申を受けて新たに設定した教育目標および教育方針に基づいて、以下の5つの柱からなる教育施策を中心に、教育の質を高める取り組みを展開し、特色ある大学づくりを進める。

1. 少人数教育を推進する

学生の意欲を促し、学習成果を確実なものとするため、教職員と学生の双方向のコミュニケーションを密にすることのできる少人数教育を推進する。

- (1) 課題基盤型学習 (PBL) を利用した少人数学習
- (2) ゼミナール形式の授業への1年生からの参加
- (3) Web利用による学生との学習コミュニケーションの促進
- (4) 学部を超えた混成小グループ教育

2. 総合大学の利点を活かした教育を推進する

医療系学部と文系学部をもつ総合大学であるという本

学の利点を活かして、双方の教員による講義等を導入することにより、学生に幅広い学習機会を提供する。

- (1) 医療系教員と文系教員による教育における相互交流の促進
- (2) 全学的な教養講座の開催
- (3) 他学部履修の推奨

3. 学生支援体制を整備する

大学はいまや学生に単に正課の授業を行うだけでなく、学内外でのさまざまな課外活動の機会を提供して、学生の社会的な人間力を培い、社会人となるにふさわしい能力を育成することが求められている。以下の6点について幅広い学生支援のための体制を整備する。

- (1) オフィスアワー制度の改善
- (2) アカデミック・アドバイザー制度の強化
- (3) ピア・サポートシステムの構築
- (4) 現行オリエンテーションの改善
- (5) 学生ポートフォリオの導入
- (6) 中退者を減らすための取り組みを進める体制の構築

4. 教職協働体制を構築する

- (1) FD(Faculty Development) の推進
 - (2) SD(Staff Development) の推進
 - (3) 教育支援等を進めるための専門部署の設置
- <理事会への要望>

- (1) キャンパスの施設整備を推進する
- (2) 奨学金・奨励金の充実の検討

【3】学部・学科のスクラップ&ビルドを検討する

1. 定員の振り替えを検討する

2. 学部・学科の編成を見直す

【4】杏林大学の総合力を高める

社会は大学を評価する際、単に学部教育についてだけでなく、大学院の内容、海外交流の状況、補助金や科研費の獲得状況、さらに志願者獲得状況などを含め多面的・総合的に評価するようになってきた。いわば大学の総合力を表すこれらの部分についても整備を進めることが重要である。

1. 大学院の整備を再検討し実施する

大学院定員を見直し、定員充足率を改善するとともに、とくに国際協力研究科を特色ある大学院とすべく教員組織の変更、教育システムの改善、大学院施設設備の充実などを行う。

- (1) 大学院定員の削減の検討
- (2) 特色ある国際協力研究科の強化
- (3) 社会人受け入れ体制の充実

2. 海外交流を促進する

海外からの多数の学生を本学に受け入れ、本学学生を語学研修、インターンシップ、派遣留学、交換留学などの海外研修プログラムへ多数参加させるなど海外交流を一層促進するために、学生および教職員が海外交流しやすい環境を整える必要がある。

- (1) 全学的な国際交流センター機能の整備
- (2) 国際交流のための環境づくり

3. 教育・研究業績の向上を図る

大学に対する評価を高めるためには、教員は教育力を高めるとともに、研究業績を高めなくてはならない。大学として特色ある教育、ならびに高度な研究への取り組みを全学的に推進し、GP(Good Practice)、科学研究費補助金獲得実績を高めるためのシステムを構築。

- (1) GP獲得のための協力体制の強化
- (2) 科研費申請率の向上

4. 入試における入学者選抜機能を高める

大学は、安定的な経営を維持するために入学者数を確保することが重要であるが、同時に大学の理念、目的を実現するためには入学試験の選抜機能を高め、資質の高い学生を受け入れることが望ましい。このためには教育の質を向上させ魅力ある大学にすることが第一であるが、それとともに高校生が受験しやすくなるよう入学試験にかかわる改善を検討するとともに大学の知名度を上げるための活動を引き続き進める必要がある。

- (1) 入学試験に関連した改善
- (2) 入試広報活動の継続
- (3) 各学部の定員の再検討

5. 高大連携の構築

高校・地域・社会との連携の必要性がますます高まっている。とりわけ高校側にあっても、高校一大学一社会へと続くキャリア選択が望ましいものとなるような高大双方からの連携を求めていることから、今後は教育内容や方法を含めた全体の高大連携を教育活動の中で検討する。

- (1) 高校教員・生徒が真に求めている進路学習・総合学習のための「総合的出張講義・進路説明会」を開催する。「出張講義」では「単位の互換」についても検討する。
- (2) サマースクール(夏期集中講義)またはスプリングスクール(春期集中講義)の形式で「大学での授業開放」を実施し、取得した単位を高校での単位や大学入学後の単位に充当することを積極的に検討。
- (3) 高校からの提言をカリキュラム策定に取り入れ、連携を強化する。
- (4) 大学入学後の基礎教育や入学前教育における高校教員との連携を深める。
- (5) 高大教職員で、双方がもつ様々な問題に関する意見交換の場や、定期的な研究会を設ける。

【5】本提言を実行するPDCAサイクルを構築する

【1】から【4】までに述べられた中期計画(PLAN)の提言を確実に達成するためには、提言を実施し(DO)、実施状況を検査・評価し(CHECK)、さらに将来の改善(ACTION)につなげていく、いわゆるPDCAサイクルを構築することが重要である。このためにPDCAを循環させることを担当し、合わせて中長期的な「杏林大学のあり方」を検討する組織を新設することが必要である。この提言は今回の提言の中で最重要事項に位置づけられると考える。

1. 本提言のPDCA担当組織を構築する

- (1) 専門委員会の役割
- (2) 中期計画実行委員会ならびに8実行部会の役割

2. 中長期的な「杏林大学のあり方」の検討

作業療法学科開設に向けて

保健学部長 大瀧純一

保健学部は平成23年度から7学科となります。各学科においては専門教育だけでなくさまざまな技術も修得できます。疾病の診断に必要な臨床検査技術、健康や環境を維持管理するための健康教育や管理技術、救急救命の技術、疾病や障害をもつ方の看護技術・援助技術、医療現場で使われる機器の

操作・保守・点検・開発、リハビリテーションの理学療法的な技術など多彩な面にわたっています。

来年度は、大きな社会問題となっている認知症への専門技術を備えた人材を育成するための作業療法学科が誕生します。

されています。つまり、リハビリテーションの効果は期待できると考えられていますが、残念なことに認知症のリハビリテーションを行なう専門家はごく少数で、絶対数の不足が顕著であります。

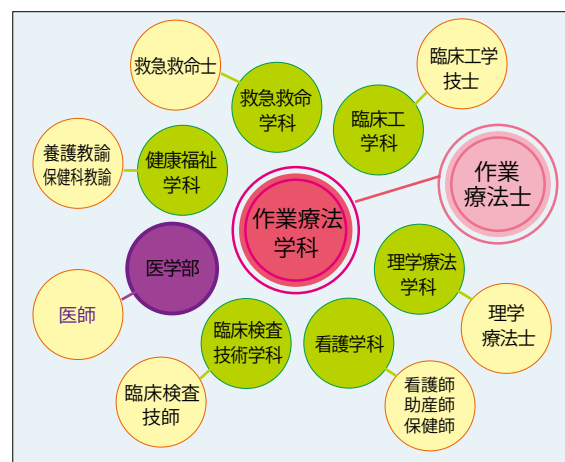
そこで今回、杏林大学保健学部では、認知症の高齢者が増加している現在の状況を考え、先の「脳卒中に強い理学療法士」と同様に、「認知症に強い作業療法士」をコンセプトに作業療法士を育成することに致しました。

当然、本学医学部付属病院リハビリテーション室の全面協力を得て、医学や保健学、看護学をベースに専門技術を学び、総合政策学部や外国語学部との連携で、学生一人一人の持ち味をいかした柔軟な思考力を持つ、作業療法士の育成を図ります。

作業療法士はリハビリテーションの一分野を担っており、医療の進歩と共に様々な診療科での活躍が期待されています。たとえば、認知症を例にとると、本学医学部付属病院もの忘れセンターでは、様々な病態でもの忘れを主訴とする患者さんが増加し、それらの患者さんに対して、正確な診断、治療だけでなく、日常生活の留意点などまで説明し、認知症の進行防止に日夜努力しています。

しかし、認知症において特効薬はなく、現在のところ一部の薬が有効との報告もありますが、薬物療法のみで対処することは困難です。

一方、様々な施設から、継続的な日常的リハビリテーションの効果報告が多数されており、認知機能を考えたリハビリテーションの重要性が指摘



専門職として広範な知識と高度な作業療法の専門技術を持ち、豊かな人間性を備え、社会に貢献できる人材を輩出したいと思っています。認知症の患者さんのご家族から、さすが杏林大学で学んだ専門家は違う、と言った評価が得られるような作業療法士の育成を目指したいと思います。

また、本学科では医学部付属病院を活用することで、一般的な疾患から稀な疾患まで幅広く学ぶことができ、各々の患者さんに対し最良のリハビリテーション技術を修得できます。これから作業療法士として活躍したいと考えている皆さんに、かけがえのない学びの場となることでしょう。

学生支援の取り組み

- ・学生支援センターが設置されて1年半が経過しました。これからの学士課程教育においては、それぞれの教育目標を達成するために、大学がどのような学生支援を行っているかということが大切なポイントになります。
- ・杏林大学は、すべての教職員が力を合わせ心一つにして新入学生を迎え入れ、さまざまな支援を通して、一人ひとりの学生の人間の成長を促し、自信をもって社会に送り出そうと努力しています。
- ・大学にはどのような部署があり、どんなことができるのかをぜひ知ってください。「困った」「わからない」「悩んでいる」という学生がしかるべき場所につながると、それが他の学生にも波及してよい連鎖を生みだし、大学が活気に満ちてくるのです。

gakushu shien
sogo shien
ryugakusei shien
dosokai shien
gakusei sodan
keizai shien
gakuseiseikatsu shien
kagaikatsudo shien

教務課

履修登録から緊急情報まで
ユニパでサービス向上を図る

八王子キャンパス
D棟 1F

三鷹キャンパス
看護・医学教育研究棟 1F

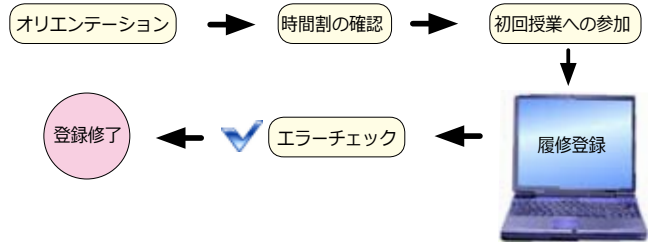
いま大学では様々な分野においてユニバーサルパスポート（以下ユニパ）が活用されています。ユニパはWeb サービスを利用した学生支援システムのことで、学生サービスの向上を目的として2006年より導入されました。

ユニパは休講情報や緊急情報を携帯メールに自動配信するほか、求人情報や各種イベント情報などをいつでもリアルタイムに見ることができます。そのほか履修登録、課題提出、就職報告などが自宅や外出先で行えるなどの双方向型の機能があります。なかでも、履修登録は従来のOCRを使った読み込み式の受付方法に比べ、誤記入や

汚損による読み取りエラーもなく、学生が窓口に並ぶ負担もなくなりました。

インターネット環境のあるところならどこでも、その場で登録が可能で、エラーチェックや修正もできます。シラバス（講義要目）の閲覧も容易になったことで履修登録に要する時間も大幅に短縮されました。

今後は、モバイル端末からの利用や学生証と連動した出席管理、学生ポートフォリオの共有、学生情報のワンストップサービスなどシステムを発展させることで、更にサービスを充実させていきます。
(教務課 安藤英視)



入学センター

学生パワーも
大事な戦力

八王子キャンパス
B棟 1F



この夏、オープンキャンパスのアルバイトをした保健学部3年生の栗谷美緒さん。「バス停付近で誘導を担当しました。チャーターバスの発車時刻を伝えたり、構内を案内するなど、初めてキャンパスに来られた皆さんにわかりやすくお伝えできるよう心がけました。右は指導にあたった同センター職員の藤本さん。

入学センターの業務の中で、学生の支援を受けて実施するものがあります。特に主要な業務は、オープンキャンパスや入学試験での誘導係等のアルバイトです。

入試やオープンキャンパスでは高校生や受験生など数千名がキャンパス等を訪れます。会場案内などをスムーズに行うためには構内を良く知る学生パワーが大活躍します。

学生の誘導係といえども大学のスタッフ。入学センターでは、事前に挨拶や言葉遣い、服装など接遇の心構えを指導します。学生が大学の一人であることを自覚して、各業務にあたるためです。

学生たちの仕事ぶりは期待通り。サービス精神にもあふれ、学生目線で母校をアピールする工夫もしています。

入学センターではアルバイトのほかにも、職場体験を希望する学生のためにインターンシップを受け入れています。

学生の皆さんにはアルバイトやインターンシップを通して、社会人としての自覚を促しつつ、4年間の学生生活を満喫してもらいたいと思います。

(入学センター 森 芳久)

学生相談室

学生の心の健康をサポート
学生相談体制の充実

八王子キャンパス I棟 2F
三鷹キャンパス 医学資料情報センター棟 5F



右から伊藤幸江講師、石川智助教、島田正亮助教。キャンパスごとに担当が分かれています。3人で連絡をとりながら一人ひとりの学生に合ったカウンセリングができるよう努めています。

- ・本年4月より開室日が増えて週5日体制（月曜～金曜 9:00～17:00）になりました。
- ・それにつれてふらりとやってくる学生が増えました。予約なしでもカウンセリングのできる場合が格段に多くなりました。昨年より利用しやすくなったと思います。
- ・学生相談室の前進を担う、若き新任カウンセラーたちの抱負を紹介します。

石川智 (主に三鷹キャンパス担当)

4月より、学生相談室の心理士として仕事をしております。

相談業務の他、学部の心理学の講義を担当しており、講義の準備に頭を悩ませる毎日ですが、学生に顔を売る絶好の機会として活用させていただいております。

不慣れなことも多いですが、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

島田正亮 (主に八王子キャンパス担当)

在学中は、自分自身のこと、対人関係、授業や進路、部活やサークルなど、いろいろなことに迷ったり、悩んだりすることがあると思います。学生相談室は、そのような迷いや悩みについて、一緒に考えていく場所です。

学生のみなさんが、充実した学生生活を送るためのお手伝いをしていきたいと思っています。いつでも、誰でも、気軽に利用できる学生相談室でありたいと思います。

国際交流センター

国際感覚を身につけるためのプログラムを準備

八王子キャンパス
I棟 1F



今年20回目を迎えるオックスフォード語学研修。約1ヶ月の研修では、個人指導やグループ授業、ロンドン研修旅行などさまざまな体験を通して、語学力を磨く。期間中はホームステイが中心。英国の暮らしや文化にもふれる。

杏林大学は現在、海外の25大学と協定を結んでいます。本学から派遣留学生として年間約20名の学生が協定校で学び、協定校からは約70名の留学生が本学で学んでいます。

そのほかインターンシップ研修や語学研修として、年間約100名の学生が海外の大学等で学んでいます。いずれも語学はもちろんのこと国際的に活躍できる広い視野を持った人材の育成を目的とした様々なプログラムを組んでいます。

留学生に対しては奨学金や生活上のトラブルの相談など福利厚生面の支援もしています。

国際交流イベントにも力を入れています。「国際交流の集い」、「食の交流会」、学外での「日本文化体験」などを年数回

開催し、留学生、日本人学生、教職員との交流促進を図っています。

その他、外国人の日本語教師や日本語を学ぶ海外の学生のための研修、施設見学等も積極的に行っています。

国際化が加速するなか、学生たちが社会へ出た後も、国際感覚をきちんと持ち、国際的に通用する人材として活躍できるよう、国際交流センターは今後もさまざまな取り組みを行っていきます。

(国際交流センター 岩本久美子)

図書館

図書館をもっと活用しよう!

八王子キャンパス
人文・社会科学図書館 F棟 1・2F
保健学図書館 I棟 1・B1F

三鷹キャンパス
医学図書館

八王子キャンパス図書館では、今年から2つの新しい取り組みを行っています。一つは選書ツアーで、もう一つは授業時間に行う図書館の利用ガイダンスです。

選書ツアー

学生が図書館員と一緒に書店へ行き、興味のある本や勉強に必要な本、友達に読んで欲しい本などを選書する企画です。

今年の1月と6月に紀伊國屋書店の新宿南店で実施しました。ツアーに参加したのは留学生を含む学生および院生です。学生が選書した図書は、図書館と書店の確認後に納品され、図書館の蔵書として利用されています。



選んだ本をハンディターミナルで読み込む学生

図書館利用ガイダンス

入学時オリエンテーション改善の一環で今年から始めた活動です。

特に大学生活のスタートを切る1年生には大学の学習環境を知ってもらうことが大事です。各種ガイダンスが行われる4月に、初年次教育のなかで図書館の全体的な利用ガイダンスとデータベース講習を実施しました。

今後もこうした活動を通して、書誌情報検索のスキルアップをはかり、図書館を身近に感じる学生を増やしていきたいです。

(人文・社会科学図書館 釘宮 聡)



書誌情報利用ガイダンスに聞き入る学生たち

元『新人』からも近況報告

- ・相変わらず三鷹と八王子を行ったり来たりしています。学生相談室の担当日も従来どおりです。
- ・7月30日、三鷹キャンパス学生相談室が引越しました。引越先は、医学資料情報センター棟(1階は医学部事務室)の5階、「杏会事務室」の中です。これまで同様気軽に利用してください。
- ・八王子キャンパスでは、去年に引き続き今年も、学生支援センター主催の、教職員を対象とした「学生の相談に対応するための研修会」の企画に加わり、講師として参加しています。
- ・また、「かたりば」はこの春学期お休みしていましたが、再開を望む学生さんたちが「秋学期は毎月開催!」という構想のもと準備を始めました。学生と教職員が特にテーマも定めず自由に本音で語り合う集いというのは、八王子キャンパスでは見慣れた光景ですが、他大学では耳にしません。(学生相談室 伊藤幸江)

学生と学長、活発に意見交換

学生とともに作るキャンパス

本学では、学生が充実した大学生活を過ごせるよう、さまざまな形で学生たちから意見を聞く機会を設けています。教育に関しては授業の分かりやすさを学生のほうから評価する「学生による授業評価」を行って教育の質向上に繋げるよう努めています。

また、「学生生活実態調査」や「学習支援環境の整備に関する調査」など、学生たちにアンケートを行って学習環境の改善やアメニティ向上に努めています。

● 外国語・総合政策・保健学部生の懇談会—学習環境や学内マナーについて

6月30日(水)八王子キャンパスで開かれた懇談会に保健・総合政策・外国語学部の学生13名(中国からの留学生1名を含む)が参加、学長と学習環境や学生生活の過ごし方などをめぐって活発な話し合いが行われました。

この中で学内での喫煙の問題が取り上げられました。学生から「医学部や保健学部をもつ大学だから学内は全面禁煙にしてほしい」、「少なくとも分煙の徹底や喫煙マナーを守るように指導すべきだ」という意見が出されました。

跡見学長は「たばこの問題では禁煙や分煙などいろいろな意見があると思う。大学の主役である学生の皆さんが、率先して運動を起こしてほしい」と学生主導の取り組みに期待を寄せました。

また、跡見学長が学生たちに杏林大学についての感想や意見を直接聞きました。

「先生と学生の距離が近い」、「病院がある良さが活かされていない」



意見を発表する医学部の代表者とそれを聞く教授陣。右から3番目が跡見学長。三鷹キャンパス付属病院外来棟6階のレストラン・GARDENの一室で行われました。

外国語、総合政策、保健学部生の懇談会は八王子キャンパス外国語学部の会議室で開かれました。留学生の意見に聞き入れる学長。

などの感想・意見とともに、「杏林大学に入って、自分から積極的に活動するようになり、いろいろな経験が身についた」、「在学中にいろいろな体験をしたい。もっと日本人と交流する機会がほしい」(留学生)、「自らが行動を起こして大学を良くしていきたい」など前向きな意見表明が相次ぎました。

● 医学部生の懇談会—図書館や設備などへの要望

これに先立ち、6月18日(金)

さらに、学長が学生の意見を直接聞く「学長と学生の懇談会」を毎年実施しており、今年は6月中旬から下旬にかけて、跡見裕学長と八王子キャンパス・三鷹キャンパスの学生との懇談会が計3回行われました。今年4月に学長に就任した跡見学長にとっては初めての懇談会で、学生からはキャンパスの環境改善についての活発な意見が相次ぎました。

杏林大学では、「学生が主役の大学」に向けて教職員あげて環境整備に取り組んでいます。

「夏休みの間に男女全てのトイレを改装します」という報告があり、学生から拍手と感謝の声が上がりました。

● 保健学部看護学科生の懇談会—教室設備やアメニティ施設への要望

また、6月25日(金)には保健学部看護学科生6名との懇談会が開かれました。

学生からは「大教室の設備に関して、ホワイトボードが教室の規模に対して小さすぎる」「座席によりエアコンの利き具合に大きな差がある」などの要望や、「男子学生用のトイレを増やしてほしい」、「軽く運動できる施設をつくってほしい」などの要望が寄せられました。

これらに対して大学は対応可能なものから善処していくと説明しました。

看護学科は八王子キャンパスから三鷹キャンパスに移転して2年目。大学は今回出された意見も参考にしながら学習環境の改善やアメニティの向上などを進めていきます。

長澤前学長 退任・叙勲祝賀会

日本医学界に貢献された長澤前学長を学園関係者ら400名が祝う



舞台右手、長澤前学長御夫妻。祝辞を述べる日本医学会会長・自治医科大学学長の高久史麿氏。

腎臓病・膠原病などの専門医として優れた業績をあげられるとともに3期12年にわたり杏林大学の学長を務められ、今春、瑞宝重光章を受章した長澤俊彦前学長の功績をたたえて6月13日(日)、帝国ホテル・富士の間で「学長退任ならびに叙勲祝賀会」が開催されました。祝賀会には本学園関係者や医学界関係者など約400名が出席しました。

初めに発起人を代表して松田博青理事長が「本学医学部が発足したときから40年の長きにわたり種々ご尽力いただきました。この間、先生の飾らぬお人柄を慕って内外から多数の人材が集まり、教育・診療・研究の面でご指導いただきました。このたびの叙勲は先生の長年にわたる医学界、社会への貢献が総合的に評価されたものと思っております」と祝辞を述べました。

続いて、日本医学会会長で自治医科大学の高久史麿学長、日本

リウマチ学会元理事長で埼玉医科大学の安倍達名誉教授、日本腎臓学会理事長で岡山大学の榎野博史教授から前学長の功績をたたえる祝辞がありました。

祝賀会は日本内科学会元理事長で東京大学の藤田敏郎教授による乾杯の御発声のあと懇談に移りました。前学長御夫妻の前にはお祝いの言葉を述べる人たちの長い列ができ、思い出話を語り合ったり、一緒に記念写真に納まったりして、笑い声の絶えない和やかな雰囲気に終始つまれました。

最後に長澤前学長が謝辞を述べました。「東大時代の恩師沖中重雄先生は“明日の医学は患者にある”との名言を残されました。私は今日までこの言葉を旨として臨床医としての道を過ごしてまいりました。また、30有余年にわたりご指導くださった松田博青理事長は“あらゆることに王道を歩め”という言葉がモットーで、私もその言葉を実践して医学部長、学長の任務を全うすることができたことをこの場を借りて心から感謝します。私にリウマチ病学の手ほどきをくださった慶應義塾大学の故本間光夫教授は内科学会の宿題講演で学問と臨床の道は“日暮れて道遠し”と結ばれました。私はこの言葉が好きです。これからも日がとっぷり暮れるまでひたすら自分の道を歩むつもりです」。

長澤前学長は止むことのない学究者としての志を語るとともに、出席者に感謝の言葉を述べて、2時間余に及んだ祝賀会を終えました。



長澤俊彦氏 略歴

昭和31年 東京大学医学部卒業
昭和37年 西独デュルツブルク大学 医学部内科研究員
昭和45年 杏林大学医学部内科助教授
昭和50年 杏林大学医学部内科教授
平成4年 杏林大学医学部長
平成10年～22年 杏林大学長

診察・研究業績

内科学、腎臓病学、膠原病学等の診療・研究活動に対し、ベルツ賞、腎研究学会学術賞、日本腎臓財団賞等を授与される。日本医学会評議員、日本内科学会理事、日本腎臓学会理事長、日本リウマチ学会評議員等歴任。

教育研究業績

国際交流センターの設置、学科の新設・改組、教員評価制度の確立等に主導的役割を果たす。日本私立医科大学協会理事、(財)医学教育振興財団理事を務め、日本の医学教育の振興に貢献。

学部・大学院トピックス

医学部

「地域枠」入学試験を実施 定員111名に

医学部入学試験における「地域枠」は、医師不足解消をめざす都道府県の地域医療再生計画に基づくもので、国が医学部の定員増を認め、各都道府県が奨学金を出して将来の医師の確保を図るためのものです。

本学では東京都枠5名、茨城県枠1名の計6名の定員増が国から認可されました。これにより、本学医学部の入学定員は105名から111名となりました。

認可から出願までわずか1か月と短期間でしたが、東京都と茨城県あわせて



109名の志願者があり、厳しい競争を突破して6名が合格しました。

東京都では、多摩地区で人口当たりの病床数や医師数が都平均を下回っており、特に小児医療および周産期医療の確保が大きな課題となっています。

地域枠で合格した学生は将来地域で診療することが条件となっています。東京都の枠で合格した学生は、医師になった後9年間、都内の小児医療、周産期医療、救急医療、へき地医療等に従事することになっています。

付属病院

新しくなった検査部

本年5月、検査部は第1病棟から第2病棟に連なる地下1階に全て移転しました。外来棟地下1階の放射線部と隣接するため、患者さんの利便性が向上しています。

検査室は、外来採血室・検体検査室・生理検査室の3つに分かれます。外来採血室では採血ブースの拡充と案内板の設置などにより、患者さんをお待たせしない採血が可能となり、隣の検体検査室で直ちに測定を行なっています。検体検査室では全ての機器を一新し、迅速かつ精度の高い結果を得ることが可能となり、24時間検査可能な項目も充実しました。

生理検査室は心電図・呼吸・脳波・超音



上部モニター画面は、検査中および待合の人数を受付時に発行する整理番号で表示します。お呼びした際に不在であった方もこの番号でお知らせします。

波に分かれていた検査室を統合し、各検査ブースを個室化することで、効率的かつ快適な環境を整備しました。

新しくなった検査部は、これまで以上に杏林大学病院の医療に貢献できるものと確信しています。

(臨床検査医学 講師 岸野智則)

保健学部

病院を支える様々な業務・部署を知る「総合医療演習Ⅱ」

昨年度からスタートした臨床検査技術学科の演習科目「総合医療演習Ⅱ」は、臨床検査技師が活躍する職場を見学したり、実際そこで働いている方から実務関連の講義を受けたりして、病院を支える様々な業務について理解を深めることに役立っています。

●医学部講堂での講義

講義は高度救命救急センターなどの中央診療部門、手術部、リハビリテーション室などの中央診療支援部門、看護部、栄養部などの各部署や医事課などの事務部門の職員に、各部署と臨床検査技師との関連、各部署が臨床検査技師に期待することなどを含めて講義をしていただいています。

●杏林大学病院の見学研修

6~7人のグループに分かれて内視鏡室、放射線部、腎透析センター、理学・作業・言語療法室、薬剤部、中央病棟などを、12~14人のグループで高度救命救急センター、手術部など最新の医療設備・施設を見学します。さまざまな職種の医療スタッフが医療現場を支えていることがわかり、卒業後の将来像を明確に見据えることができる研修です。

養護教諭養成教育の一環 学校保健実践研究会

杏里会（同窓会）の支援をいただいて開催している「学校保健実践研究会」も今年度で第8回を迎えます。教育現場における学校保健活動の活性化をめざして、卒業生の卒業教育、ならびに在学生の幅広い学習の機会として実施しているもので、例年110名~140名の参加があり、大変嬉しく感じております。

研究会は、基調講演・卒業生実践報告・情報交換会の3部で構成され、基調講演での医学領域講話やベテラン養護教諭の実践は専門的知識や養護実践の理解を深め、実践報告は、先輩後輩・同級生同士が刺激を受け合い、仕事の見直しをする場にもなっているようです。



研究会の基調講演の様子（本年2月）

保健学部には教職課程が開設されて18年目を迎えますが、実践報告は何れも創造性を感じさせるものばかりで、卒業生の活躍と逞しさを実感いたしました。昨今は健康教育の高いスキルを持ち合わせた養護教諭への期待は大きく、今後も社会の期待に応えるべく、養護教諭の養成に努力して参ります。

(教職課程運営委員会委員長 大嶺智子)

在学生リレー エンジョイ☆杏林 Life

ベストナインに 切手選手と廣田選手

切手孝太 (総合政策学部1年) **廣田啓介** (総合政策学部1年)

写真左。東京都生まれ。日本文理高等学校(新潟)出身。2009年夏の甲子園大会では攻守に活躍。決勝戦は中京大中京に9対10で惜敗。2010年東京新大学野球大会春季リーグ戦では3番遊撃手としてチームを牽引、打率.326、6打点。

写真右。東京都生まれ。安田学園高等学校(東京)出身。左左。2010年春季リーグ戦では指名打者(DH)として打率.324、1本塁打5打点の活躍。



ベストナインは東京新大学野球連盟1部所属6大学から、ポジションごとに最高打率選手が1人選ばれる。切手選手は遊撃手、廣田選手は指名打者部門でそれぞれ選ばれた。なお、杏林大学野球部からはこれまで14人がベストナインに選出されている。

—2010年春季リーグ戦でともにベストナインに選ばれましたね。(ベストナインは2・3・4年生でほぼ占められる。杏林大学から1年生が2人選ばれたのは初めて。)

切手：個人タイトルはチームがいい成績を残せば結果としてついてくるものです。ベストナインは自分がとったというより、とらせていただいたものだと思います。その意味でこれからもチームに貢献してベストナインに選ばれるよう頑張りたいと思います。

廣田：ベストナインに選ばれたのは大変嬉しい。これはチーム全員の頑張りと、DHとして起用してくださった監督のおかげです。今大会では試合の流れをつかんできっちり役割を果たさねばならないDHの難しさや楽しさを経験でき、収穫は大きかったです。

—野球との出会い、そして杏林へ

切手：最初はサッカーに興味がありましたが、母の勧めで小学校2年生のときに野球を始めました。リトルシニアクラブチームで硬式野球をしていたために甲子園をめざす気持ちが強くなり、日本文理高校に進みました。杏林大学には1学年上の高校の先輩がいたこともあり入学を決めました。

廣田：野球好きの父の影響で小学校1年生のときから野球を始めました。安田学園高校2年の秋には東京都大会でベスト16になりました。友人の先輩がいたこともあり杏林大学に入学しました。

—大学野球の印象

切手：高校までは金属バットを使用し、大学では木製バットに変わりましたが、このほうがむしろ私にはあっていると思いました。卒業高校のチームレベルが大変高かったことは確かです。今は杏林大学チームを強くしたいという気持ちでいっぱいです。春季リーグ戦では入れ替え戦で負け2部に落ちましたが、しっかり練習して強くなり、みなで勝利する実感を味わいたいと思います。

廣田：春の大会ではポジションもそうですが、これまでとは違った感覚で野球を楽しむことができました。1年生からレギュラーになるチャンスがあるなど、監督やメンバーが認めてくれて自信をもつことができ、チームに大いに貢献しようと思えました。

—チームで求められていること、これからめざすこと

廣田：タイムリーにヒットを打つだけでなく、試合の流れを読んで走者をきちんと送るなど監督の指示に確実に応えて、チームのために働くことだと思います。

まずは2部から1部へ復帰することです。気持ちを切り換えて、次のリーグに臨む準備をしています。

切手：チームには先輩が大勢いる中で、1年生の私が3番、廣田が4番を打たせてもらっています。これは監督やチームがいい結果を出すことを期待しているからであり、チャンスは確実にものにして、また自らがチャンスをつくる原動力となるのが求められているのだと思います。

全員が1試合も落とさないという強い意志をもったチームを作り上げたいです。来春のリーグでは1部で戦えるよう、1日もムダにせずしっかり練習に励んでいくつもりです。

卒業生リレー

ボルネオから ご挨拶申し上げます

マレーシア国立サラワク総合病院 救急部勤務



麻生有二 **あそう ゆうじ** (医学部1982年卒)



世界で3番目に大きな島、ボルネオ島の北西部に日本の国土の30%ほどの面積のサラワク州があり、カリマンタン(インドネシア)と接しています。ここボルネオ島の奥地では手漕ぎボートも交通手段です。左上写真は相模取りに似ている?人面虫。

皆様はボルネオからご挨拶申し上げます。私はマレーシア領サラワク州で救急医療に従事しております。

こちらは1992年から杏林大学が中心になり医療協力が行われ、今では年間10万人を超える救急患者の治療と750名を超える医学部学生などの教育を行うまでになりました。当時から研修生を受け入れて頂いた松田理事長先生をはじめ多くの杏林大学の皆様のご支援の賜物です。

私は、現在奥地に出かけて行き僻地医療も行っています。まだ電気、水道も無く、マラリアやデング熱、結核、食中毒が多く地方での医療サービスが十分ではありません。先住民(昔首狩り族)の村に泊りこみ蚊に刺されながら、トイレは穴を掘り、川で体を洗い、猪を喰らい、元気に活動しております。川にはワニがいるので喧嘩をしないように仲良く遊んでいます。

こちらは7世紀からブルネイのサルタン家が支配していました、1842年から白人の王さま“White Raja”が王国を築き、英国により徹底的に調査、研究が行われています。有名なA.ウォーレス卿の生物学的境界線ウォーレスラインは有名です。世界で初めての蝶の切手ラジャブルック、サイ鳥、世界一大きい花ラフレシアなど自然遺産が盛りだくさんです。

現在は京都大学の研究者がマラリア、鳥、植物の分類、森林、河川、少数民族などの多くの調査を行っています。勿論医学研究は杏林大学です。

原稿を書いている今も蚊に刺された両足が痒くて、痒くて、こういう時にはビールが一番。ビール飲んだら益々痒くなり熱も出てきたので今回はこれで失礼致します。(ブルブル震えがとまらない)

麻生先生は2010年8月5日付けで外務省医務官となり、9月初旬にカザフスタン大使館勤務となります。



友人のオードリ



大自然の中でたくましく、のびのびと育つ狩猟民族ブナンの子どもたち

総合政策学部

学生一人ひとりのための「プログレス・ノート」

総合政策学部では、本年度から新入生が「プログレス・ノート」を活用しています。学生生活の目標を立て、成長の軌跡を記録し、教員や各部署が相談にのります。

まず、入学時に、大学生活、学習、課外活動、キャリア形成など学生各自が自分の目標を「プログレス・ノート」に記入します。そして月ごとの進行状況等を記録して確認し、問題があれば相談しアドバイスを受け、より意義がある大学生活になることをめざします。

すでに、大学は基礎教養科目、キャリア開発論などのカリキュラムを通じて、学生一人ひとりを育成する体制を構築していますが、



表紙を開くと、まず卒業までの目標を記入する欄がある。次のページからは月ごとに、学生生活で生じた疑問や相談、それに対する教職員の面談者のアドバイスが記入できる仕様になっている。

「プログレス・ノート」はその一環として活用されているものです。なお、これらの取り組みは、文部科学省の「大学生の就業力育成支援事業(GP)」として申請中です。

『社会のしくみ』第2版を出版！

本書は、国際政治、経済、法律、政治、経営、会計、環境・人・福祉、の7つの分野の重要なテーマについて、総合政策学部の41人の教員が執筆したものです。専門的で難解なテーマを、分かりやすい文章で平易に解説しています。

1項目は原則2ページ見開き、全ページ2色刷、カラー写真ページ多数。巻末には、大変便利なキーワード集、統計、データ、図表、各種年表、基本文献一覧が付いています。



入門 社会のしくみ 第2版
複雑な世の中を理解するための道具箱
発行 平成22年3月30日
編者 杏林大学総合政策学部
発行所 丸善株式会社
頁数 337ページ
定価 1,800円＋税

この『社会のしくみ』は総合政策学部新入生のためのテキストであり、社会科学への最適の入門書です。高校訪問の際には高校の先生方からも好評を博しています。

外国語学部

フレッシューズキャンプを実施

今年度スタートした観光交流文化学科の1年生90人を対象にした「フレッシューズキャンプ」を4月10日(土)、11日(日)に、山梨県河口湖畔のホテルで実施しました。

この合宿の目的は、①キャンパス内にとどまらない観光の実践教育、②観光およびホスピタリティ分野におけるチームワークの重要性の認識、③大学生活を有意義に過ごすための仲間づくりで、参加者はグループに分かれて実践型の取り組みをしました。

各グループの補助には応用コミュニケーション学科観光文化コースの4年生10人があたり、チームビルディングゲームや、グループディスカッション、グループ発表等を通し、実践教育、コミュニケーションの拡大・深化を図ることができました。フレッシューズキャンプは来年度は全学科で実施を予定しています。

(観光交流文化学科 講師 井手拓郎)



ペーパータワー作り。40枚の紙を使って、グループでできるだけ高い自立したタワーを作ってもらいました。発想力とチームワークを鍛えるワークです。

キャンパス情報④

医学部同窓会

会員の皆さまの情報交換と学生の大学生活をお手伝い

医学部同窓会は、会員相互の親睦、医学研鑽、後進への便宜をもって杏林大学医学部の発展に寄与することを目的として平成元年4月に設立され、今年で22年目を迎えました。

事務局は設立時から三鷹キャンパスの本部棟5階に置かせて頂き、2名の職員が常駐しています。会員は、名誉会員・特別会員・正会員・学生会員で構成されており、会員総数は4104名で、そのうち医学部卒業生である正会員は3351名です。

同窓会の主な活動は、年3回の同窓会誌の発行、会員名簿の発行、4月の総会、6月の女性部会総会、10月の全国支部長会の開催などです。同期会や支部会も各地で開催されておりま

す。その他、学生会員に対しては国家試験対策、杏祭、クラブ活動の援助、卒業記念品贈呈なども行っております。また全国私立医科大学同窓会連絡会に所属し、他大学同窓会との連携を深めております。

設立当初の会員数は2000名足らずでしたが、現在は2倍に増え、活動も活発になってきました。

同窓会事務局は、大学の教職員の方々のご支援とご協力を頂きながら日頃の業務を行っております。この場をお借りして心より御礼申し上げますとともに今後とも同窓会活動にご理解を賜りますようお願い申し上げます。

(医学部同窓会事務局)



事務局のある本部棟エントランス

大学院医学研究科

杏林大学大学院は医学、保健学、国際協力の3つの研究科を設置しています。各研究科ではさらに細分化された専攻に分かれて専門性をより深めていきます。今回は、「働きつつ大学院に就学する人」に対して授業や研究指導を夜間や土曜日に行うなど、社会人の積極的な受け入れを進めている医学研究科に注目し、そこで学ぶ院生に授業や研究室のことなどを伺いました。

— 大学院進学を決めた理由

私は、医学部を卒業して10年目になります。今まで、10年間は病院での診療、手術など臨床のみを経験してきました。さらに医療を追究しようと考えた時に、基礎医学の知識や考え方の必要性を感じました。そこで大学院進学を考えました。

しかし社会人となり10年も経つと結婚し、子供がいる環境の中で、独身時代のように自分だけの生活ではなくなるのも事実です。以前までは、大学院に入ることは学生になることであり、やはり学費や収入などの問題で進学を躊躇する方もいたそうです。そのような面からも大学院に進学しやすくなったと感じています。

— 研究や所属教室の雰囲気 学生時代とのちがいは

現状では詳細な研究テーマは決定していません。分子生物学や臨床病理学の分野で、臨床に直結した研究テーマを検討中です。

教室は消化器・一般外科学教室に所属しています。教室の雰囲気は、杉山教授をはじめスタッフの先生方が、院生に親身になってアドバイスをしていただけの環境があり、とても充実した学生生活をおくっています。

医学生時代は、受け身の立場で医学を学んでいた感じがありました。しかし大学院は自主性が大切で、自らが研究を進めていかなくてはならない点が学生時代と大きく違う所だと思います。

— 1週間のスケジュール

現在は、日中は大学病院で診療し、夕方から基礎医学の知識を学ぶために週1～2回の講義を受けています。

— これから

研究テーマを決めて、研究と日常診療の両立を図っていきたいと思います。



研究と診療の両立を図る

吉敷智和 (きしき ともかず)
専攻：外科系外科学 (消化器・一般外科学)
平成13年3月杏林大学医学部卒業。
平成22年4月医学研究科入学。

地域交流 杏林大学の地域交流活動

「地域に根ざした大学」をめざして

トピックス 羽村市との連携協定を締結



協定書を交わした並木市長(左)と跡見学長

学長が協定書にサインしました。このような包括的な連携協定は羽村市・本学ともに初めてのことです。

羽村市との連携は、昭和62年5月に同市が「平日夜間急患センター」を開設した際、杏林大学病院から内科・小児科医師を週2～3日派遣して羽村市の開業医とともに安定した診療体制を実現させたことにはじまります。この連携は今も継続しています。

また平成19年度から生涯学習センター「ゆとろぎ」を会場にして、本学教員が市民対象の講演会を実施しています。これは本学教員のもつ専門的かつ質の高い研究を地域に還元することと、市民の学習機会を拡充し、生涯学習環境の向上を図るということで双方の意見が一致し、平成21年度までの3年間で、7人の教員が、合計8回にわたり講演会等の市民講座を開催しています。

さらに本年6月からは、羽村市から提案されたスクールインターンシップ事業として武蔵野小学校での本学学生による英語指導活動も行われています。

今後の連携事業については本学と羽村市が設置する連携協議会で検討することになりますが、地域産業の振興、地域文化の振興、教育、生涯学習、まちづくり、学術研究、健康・福祉、自然・環境など様々な分野にわたって広範囲に行うことにしています。

杏林大学と羽村市は、保有する資源および研究成果等の交流を促進して、文化、教育、学術等の分野で連携して相互に協力し、活力ある地域社会の創造、人材育成及び両者の発展に資することを目的に、包括的な連携協定を締結しました。

協定調印式は6月29日(火)、羽村市と杏林大学の幹部のほか、羽村市議会関係者出席のもと同市生涯学習センター「ゆとろぎ」レセプションホールで行われ、羽村市の並木心市長と本学の跡見裕

トピックス ふたご・みつごの親の交流会を開催

第5回ツインズマーケット



交流会には両親とともにふたご10組、みつご1組、その兄弟6人も参加。保健学部の学生が保育補助にあたりました。

三鷹キャンパスで3月13日(土)、ふたご・みつごの親の交流会「ツインズマーケット」が開かれ、多摩地区の多胎育児中の親34人と本学付属病院の助産師3人、多摩地区に勤務する保健師1人が参加しました。

この交流会は、本学保健学部看護学科の教員4人が中心となり活動する「多摩多胎ネット」の取り組みの一つで、地域のネットワークを活かした多胎児を育てる親の情報交換の場として毎年開催しています。

当日は、保健学部 田島治教授が「子育て中の母親の心の健康」をテーマに講演を行い、育児をする上での気持ちの持ち方について助言しました。また、母親と父親別、子供の月齢別、仕事の有無別にグループに分かれて情報を交換しました。参加者から「先輩パパ、ママから体験談を聞くことができた」、「ふたごを持つ親の心境を分かち合えてよかった」等の感想が寄せられるなど、大変有意義な会合となりました。次回は来年3月に開催する予定です。

この他「多摩多胎ネット」では、昨年度から本学付属病院の産科医師や助産師の協力を得て「多胎育児準備教室」を開催しています。多胎妊娠期から育児期まで継続した支援の新たな取り組みを開始しています。

(保健学部看護学科准教授 佐藤喜美子)

クラブ・サークル紹介

八王子・三鷹両キャンパスではあわせて87のクラブとサークルが活動しています。今回は、昨年の関東大学バレーボール秋季リーグの7部、同春季リーグ6部を制し、現在5部リーグで活動する女子バレーボール部を紹介いたします。

●女子バレーボール部

少数精鋭、創部初のリーグ4部をめざす

女子バレーボール部は、杏林大学の前身、杏林短期大学時代の1966年に創部された本学で最も伝統のあるクラブです。

現在、関東大学バレーボール連盟に加盟し、年2回、春と秋のリーグ戦に出場しています。私たちは、昨年度秋季7部リーグ戦で、2セット落としはしたものの7戦全勝で6部へ昇格。今年の春季6部リーグ戦は1年生が加入し、新メンバーで臨みました。初戦こそ流れをつかむのに苦労しましたが、接戦を制して勢いにのり2季連続で全勝優勝。現在は5部に在籍しています。

部員は保健学部と外国語学部の学生で編成しています。4年生2人、2年生6人、1年生3人の計11人です。バレーボールチームとしてはとても少ないメンバーですが、少ないからこそ団結し、お互い励ましあい、元気に練習しています。

過去に何度も部員不足から部活存続の危機もありましたが、いまは顧問兼監督の保健学部 田村高志先生をはじめ、外部コーチの吉谷祐輔さん、トレーナーで総合政策学部卒業生の尾崎宏美さんの指導のものと活動しています。



また、今年は第29回東日本バレーボール大学選手権大会に出場しました。大会は44大学が東京武道館など6つの会場に分かれて6月17日から20日まで行われました。私たちにあって春と秋のリーグ戦では戦うことができない格上のチームばかりが出場した大会でした。結果は1回戦で富山大学と対戦し、セットカウント0対3で敗退。しかし相手のペースに飲まれず自分たちのリズムで試合を進めること、サーブカットを確実にして攻撃につなげることなど、今後チームが成長するための課題が明らかになりました。

秋季リーグでは、創部以来初の関東学連4部をめざそうと部員一同日々練習に励んでいます。

(主将:保健学部臨床検査技術学科2年 志村敦子)

金田一 教授の研究室から ④

金田一秀穂 (きんだいち ひでほ): 1953年東京生まれ。東京外国語大学大学院修了。中国大連外語学院、米イェール大学、コロンビア大学などで日本語講師。1988年より杏林大学外国語学部で教鞭をとる。

教師の憂鬱



大学の先生は楽しそうですね、と羨ましがられる。夏休みも春休みもあるし、と言われる。確かに楽に見える。私の父親は大学の教師であり、その父親も教師だった。見ていると、楽そうだった。週二日か三日、仕事に行けばいい。長い休みの間は、どこかへ避暑とか避寒とかに行ける。そこで遊んでいるわけではないけれど、机に向かって原稿を書いているよりはよいらしい。怠け者の若者であった私は、こんなにいい商売はなさそうに思えた。世間のサラリーマンと言われる人たちは、毎日毎日、朝から満員電車に乗って出かけ、夜は遅く、付き合いとかいう会合で遅く帰ってくる。会社というところも、上司とか部下とか面倒くさい人間関係があって、怒られたり叱られたり、いかにも疲れそうだ。大人になって、職業を選ばなければならないのなら、大学教師に限る。そう思って、大きくなって、うまい具合にそのようになれた。

しかし、いざ始めてみると、これがそんなに楽な仕事ではない。私は今90分の授業が8コマある。そのための準備をしなければならず、学生に頼まれ

れば就職のための推薦書を書いたり、奨学金の世話もする。

昔は休講すると学生にも喜ばれ、よかったのだが、この頃はそうは行かない。ちゃんと補講をしなければならぬ。これで成績をつける学期末には、試験問題を作り採点をする。一時期私は700人以上の学生を持っていて、この成績をつけるのは、地獄の渦に巻き込まれているような気分だった。

更にまた、入学試験がある。外国語学部には今、何種類の入試があるのか、専門の職員でなければよく分からないにちがいない。そうしてオープンキャンパスや各地の高校訪問がある。出張講義と言って、模擬授業を高校生相手に行き、彼らの進学意欲を目覚めさせる仕事もある。

昔の大学教授というのは、とても偉そうだった。世間的な尊敬もあり、収入もあり、暇な時間もあつた。今、自分が大学教授と言われる立場になって、ちっとも実感が無い。どうなっているのだろう。



第53回東医体(東日本医科学生総合体育大会)始まる

主管校としても大会を支える

東日本医科学生体育連盟主催の総合体育大会「東医体」の夏季部門が8月に、冬季部門が12月中旬から平成23年3月まで開催されます。

杏林大学は新潟大学、日本医科大学、防衛医科大学校とともに今年の主幹校として大会運営にあたります(大会本部は杏林大学)。

大会には36大学から1万4000人の医学生が参加します。競技は陸上、野球、テニスなど全23種目で、関東甲信越地方と北海道などの各会場で開催されます。杏林大学からは13競技に24チームがエントリー。328人の学生が参加して、他大学の医学生と熱戦を繰り広げます。



第4回八王子まちづくりフォーラム11月開催へ

観光、まちづくり、ひとづくりをテーマに八王子市の活性化を提言

地域のつながりを軸に八王子市の活性化を提案する、八王子まちづくりフォーラム。

今年のテーマは「魅力ある観光地へのまちづくりとひとづくり」。観光・まちづくり・ひとづくりをキーワードに八王子のさらなる発展を視野に入れた提言をします。

八王子まちづくりフォーラム
—魅力ある観光地へのまちづくりとひとづくり—

日時: 2010年11月6日(土) 午後1時~午後4時30分
会場: 八王子市学園都市センター・イベントホール
入場無料・申込不要



平成19年から開催しているフォーラムでは、地域の活性化やまちづくりに大学が果たす役割、地域の子育てをテーマに八王子市の将来を展望。写真は昨年の様子。

杏林大学 公開講演会

●後期講演会のご案内

入場無料。詳細内容は本学ホームページをご覧ください。

9.25(土)	読書と日本語	外国語学部教授 金田一 秀穂
10.2(土)	循環器疾患とうまく付き合う	医学部教授 吉野 秀朗
10.8(金)	これからの日中関係	総合政策学部准教授 渡辺 剛
10.18(月)	環境問題はいつから始まった?	総合政策学部准教授 斉藤 崇
11.13(土)	国民病としての腰痛とロコモティブ・シンドローム	医学部教授 里見 和彦
11.17(水)	健康生活へのライフスキル	保健学部講師 朝野 聡
12.11(土)	大国ロシアの苦悩	総合政策学部教授 斎藤 元秀

数字で見る杏林大学 ④

1万1856人

平成22年度入試の志願者総数は、杏林大学全体で1万1856人でした。また、出身高校の所在地は47都道府県すべてにわたっており、杏林は全国から志願者を集めていることがわかります。

出身高校の都道府県別順位では、東京都が4163人と最多で全志願者の35.1%を占めます。次は神奈川県1368人(11.5%)、3番目は埼玉県896人(7.6%)、4番目では千葉県602人(5.1%)となり、この1都3県の首都圏では、7029人(59.3%)を占めます。

一方、遠くは、北の北海道から250人、青森県の61人、南は鹿児島県から72人、沖縄県から39人と、遠方から杏林大学をめざす高校生の奮闘ぶりも目に浮かびます。また、海外の学校からは65人、その他、大検、編転入学などの志願者も合わせて232名おられます。

最近を受験生の地元志向が強くなっていますが、杏林大学は教育の質をさらに高め、全国から多くの志願者が集まる大学をめざしていききたいと思います。

健康ひとくちメモ ④

うつ病にならないために 3つのR

現代ではうつ病はよくみられる病気のひとつであり、日本ではおよそ10人に1人はうつ病になるといわれています。うつ病は素因(生まれつき持っているうつ病になりやすい傾向)がある人にストレスが加わることによって生じます。今の社会ではストレスを生じさせる要因が多いことが、うつ病の増加をもたらしていると考えられています。

ということは、ストレスに負けないようにすれば、うつ病になることを防ぐことができるということです。ストレスといわれるストレスの要因は身の周りにいくらかでもあります。それは、今日一日の職場での上司や部下とのやり取りを振り返ってみればすぐに理解できます。大切なことは生じたストレスを溜めないということです。

人は誰でもストレスに対してある程度は抵抗力がありますが、ストレスが続けば、やがて心は歪み、素因を持つ人はうつ病へと陥ってしまうことがあります。ストレスを翌日に持ち越さないようにするには、次に示した3つのRを心がけることがよい方法です。

<ストレスを溜めないための3つのR>

- Rest (休養)**
疲れた脳と体を休ませるには、十分に良い睡眠をとることがとても大切です。
- Relaxation (癒し)**
音楽を聴いたり、アロマセラピーを楽しんだりしてくつろぐことをお勧めします。
- Recreation (活性化)**
軽い運動やぬい絵などのほか、簡単な楽器を演奏するなど、少し体を動かしながら遊びを心から楽しむことで、脳や体を活性化します。

3つのRの手段は大きさなものでは毎日続けることができません。簡単ですが始められるものをいくつかレパートリーとして持っているといいでしょう。ストレスを溜めない基本は「早寝、早起き、3度のメシ」といいますが、働くものにとっては、なかなか実行することができません。それよりも3つのRを積極的に取り入れて、忙しい日々の中でストレスを弾き出すようにして下さい。うつ病は自殺まで考えてしまうとてもつらい病気です。ストレスを防ぐちょっとした工夫を心がけて、うつ病を防いで下さい。(古賀良彦:杏林大学医学部教授 精神神経科)

こがよしひこ 昭和21年東京都生まれ。昭和46年慶應義塾大学医学部卒業後、昭和51年に杏林大学医学部精神神経科学教室に入室、平成2年に助教授、平成11年に主任教授となり現在に至る。日本催眠学会理事長、日本プレインヘルス協会理事長、日本薬物脳波学会副理事長、日本臨床神経生理学会理事などを務める。

学園祭のご案内

- 八王子キャンパス
〔外国語学部・総合政策学部・保健学部〕
杏園祭: 10月9日(土)、10日(日)
- 三鷹キャンパス
〔医学部・保健学部看護学科・看護専門学校〕
杏祭: 10月30日(土)

詳細内容は杏林大学ホームページをご覧ください。

編集を終えて

- ・本号のトップは金田一先生と松村先生にお願いしました。冒頭、かねてからの「金田一ファン」という松村教授から遠慮がちに差し出された色紙に太ペンで「融通無碍(むげ)」としたためた金田一教授。和やかな雰囲気の中で両先生の対談は、ご自身の学生時代の思い出から始まり、教育論、そして「冷静と情熱のあいだ」ならぬ「理科系と文科系のあいだ」へと深まり、いつしか杏林大学の魅力と学生への思いを語って下さっていました。
- ・記録的な猛暑の中、編集顧問の木下修総合政策学部客員教授に綿密なご指導をいただきました。
- ・第4号にご協力をいただいた多くの皆さまに御礼を申し上げます。(有)